Fusyo Collaboration letter

1月19日　　No.39　　文責　廣田　秀俊

見える学び、つながる学び～5年生の学習の連続性～

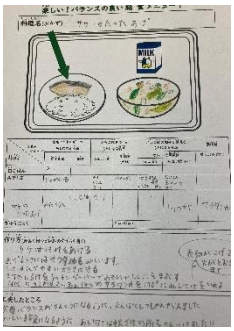
子供たちの学びは、教室の中だけで完結するものではありません。学習で得たことを「考え」「表現し」「社会へ届ける」ことで、学びはさらに深まり、広がっていきます。今回は、5年生の学習の連続性が、まさにその姿を示してくれました。

社会科の学習でメディアの役割を学んだ5年生は、新聞の「私たちの声」欄への投稿に挑戦しました。新聞のもつ正確性・信頼性・詳報性・一覧性といった特徴を学び、「情報を正しく伝えること」の大切さを意識しながら原稿をつくりあげました。

今回掲載されたテーマは『日本のおいしい食べ物を守るために』。二人の児童が、
① コンビニの売れ残りの問題　② 農業・漁業を支える人をどう増やすか　という視点から意見を発信しました。

「商品を少なめに用意する」「予約制を取り入れる」「農業や漁業をゲームで体験できるようにする」など、子供たちの発想は、現実の社会問題に向き合うものでした。自分の考えを社会に向けて言葉で伝える～まさに“学びのアウトプット”の姿です。

同じ５年生は、家庭科で給食の献立づくりにも取り組みました。五大栄養素や一汁三菜、旬の食材、食物アレルギーへの配慮など、実際の給食づくりの条件をふまえながら、主菜を考えていきました。そして、その学びは本当に給食として形になりました。



第１弾は、２組考案「サケの竜田あげ」。ごはんとみそ汁に合うように工夫し、揚げ方や温度まで細かく提案された献立です。給食の日には、考案した子供たちが放送でメニューを紹介しました。今後も３組「ほうれん草とたまごの炒め物」、１組「柑橘シャワーの幸せ　大分とり天」が予定されています。自分たちの考えた料理を、みんなで味わえる経験は、何よりの学びの実感となっています。

新聞への投稿も、給食の献立も、子供たちにとっては『教科書の中の学習』ではありません。自分の考えが社会に届くこと、実際の生活に生きることを体験する学びです。

こうしたアウトプットが、子供たちの意欲を高め、視野を広げ、次の学びへのエネルギーになっていきます。これからも、どの学年でも「学びがつながる」教育活動を大切にしていきたいと思います。